

聖書:第一列王記11章26～43節

説教:一つの灯火を保つ

はじめに

ダビデ亡き後、イスラエルの三代目の王の座に就いたソロモンは、神殿建設に成功し、それを機会に国の経済も右肩上がりの急激な成長を遂げていきます。周辺の国々も、それまでのようにイスラエルを無視することはできません。次々と平和協定を結ぼうとして、ソロモンに自分の娘を差し出してきました。その数は、王妃が七百人、そばめが三百人にまで上ります。数の多さに驚きますが、そのことが問題になったわけではありません。妻たちが信じていた他の神々をソロモンも拝むようになった、そのことが問題となりました。神はソロモンに対し二度にわたってあらかじめ警告していたのです。ところがいつこうに改めようとしません。神のご性質として、このようなとき間違っただけではさばかなければなりません。とうとう神は、イスラエル王国を引き裂くと厳しい宣告をし、ソロモンに敵対する者を起こしていきます。まず最初に登場したのが、ハダドという人で彼はイスラエルの南に拠点を構えてソロモンを苦しめます。続いて今度はイスラエルの北にレズンという人を置いて、ソロモンに敵対させます。そのことを前回見てきました。今日はその続きで、ソロモンに反逆する者として三人目となるヤロブアムが登場します。

## 1 ヤロブアム

### 1) 城壁とミロ建設工事

27, 28節を読みます。「彼が王に反逆するようになった事情はこうである。ソロモンはミロを建て、彼の父ダビデの町の破れ口をふさいでいた。ヤロブアムは手腕家であった。ソロモンはこの若者の働きぶりを見て、ヨセフの家のすべての役務を管理させた。」

このことは少し説明が必要です。ソロモンは、ダビデの町から少し離れた北側に神殿を建てていました。ダビデの町にはすでに城壁はありましたが、神殿の周りには城壁がない。これはいかにもまずい。そこでソロモンは、神殿を城壁で囲むように城壁の延長工事を行うわけです。その工事のついでミロも建てた。なぜここでミロが出て来るのか。ミロは元々谷のようにへこんだ地形になっていて、城壁を築くのがかなり難しい。城壁がないということは敵に隙を与えるということになる。ダビデもそのことは分かっていたと思いますが、おそら

く何かの事情があつてそのままにしていたようです。そこでソロモンは、城壁延長工事と一緒に、ミロに土を運んで谷を埋めて平らにし、城壁を築き直した。それが「ダビデの町の破れ口をふさいだ」ということです。

### 2) ヨセフの家 (マナセ族、エフライム族)

その工事の責任者がまだ若かったヤロブアムでした。彼の働きぶりはめざましいものがあつて、ソロモンは異例の大抜擢をして、ヨセフの家の管理を任せることにします。

ヨセフの家のヨセフのことは、創世記に出て来ます。若いときに兄弟に恨まれてエジプトに売られて大変な苦勞をしていくのですが、やがてエジプトの王に見いだされて大臣にまで出世していく。自分を裏切った兄弟たちを救し、和解して家族をエジプトに招いていく。そういうことがありました。ヨシュア記を見ると、そのヨセフの子孫たちがマナセ族とエフライム族となったと書かれています。ですから、ヨセフの家とはマナ族とエフライム族のことであり、地図で言えばエルサレムから北側の地域に広がる領域を指す。ヤロブアムはその言わば知事に任じられたわけです。

### 3) ソロモンに反逆する

ソロモンからこれほどまで信頼されていたヤロブアムでしたが、やがてソロモンに反逆していく。それはどうしてだろうと思います。このことにはソロモンにも大きな責任があるように思います。ソロモンの時代、イスラエルは大きな経済的な発展を遂げたことは先ほど述べたとおりです。まるでバブルのようにどんどん豊かになっていく。では誰が豊かになったのか。極端なことを言えばソロモンだけがバブルの恩恵を受け、他の人たちにはほとんど貧しいままだった。今の時代も格差社会と言って問題になっていますが、それと同じことがソロモンの時も起きていた。それだけでも大変なことですが、そこへ追い打ちをかけたのが、大規模な公共工事でした。ソロモンは神殿と自分が住む宮殿を建てた。加えて城壁延長工事やらミロの谷を埋める土木工事を行う。これらの工事はだれがやったのか。すべて強制的に駆り出された国民です。自分たちは家の仕事を犠牲にして働かされる。一方でソロモンは豪勢な暮らしをしている。そうしたらおもしろくない。ヤロブアムは工事現場にいま

したから、庶民のそんな不満の声を直接聞いていた。それを聞きながら次第にソロモンを憎むようになっていきます。

## 2 アヒヤの預言

### 1) 十部族をヤロブアムに

とは言っても自分ひとりで何かできるわけではありません。どうしようかと悶々とした日々が続いていたとき、預言者アヒヤが現れます。アヒヤは着ていた外套を十二に引き裂き、こうヤロブアムに言います。31節。「十切れを取りなさい。イスラエルの神、主はこう言われる。『見よ。わたしはソロモンの手から王国を引き裂き、十部族を与える。』これがヤロブアムに言われたことでした。

### 2) 一部族（ユダ族とベニヤミン族）をソロモンの子に

続く32節。「ただし、ソロモンには一つの部族だけが残る。それは、わたしのしもべダビデと、わたしがイスラエルの全部族の中から選んだ都、エルサレムに免じてのことである。」

ここで皆さんはお気づきになったはずです。イスラエルは十二部族に分かれています。そのうちの十部族はヤロブアムに与えられるのであれば、残りは二部族のはずです。ところがソロモンには一つの部族と言われるのですから、一部族足りない計算になる。これはどういうことか。別に計算間違いではない。ソロモンはダビデの息子ですから生まれながらにユダ族に属している。自分が何族に属しているかは戸籍のようなもので変わることはありません。それでユダ族は最初から計算からはずす。それで残りの一部族だけを与えると言うわけで、それがベニヤミン族だったわけです。

アヒヤが語ったことは後に現実となります。ヤロブアムはこのことばに力をもらって、公然とソロモンに逆らっていき、やがてイスラエルは北と南に分裂してしまいます。

## 3 神

### 1) ねたむ神

ここを読んである方は思うでしょう。「聖書の神は恐ろしい。他の神を拝むと叱られる。それに比べたら日本の神は実にやさしい。仏壇の横に神棚を置いて両方拝んでもなにも問題がない。」

日本の神は、本当にやさしいのでしょうか。例えば夫婦のことを考えてみましょう。夫が浮気をして他の女性の所に行ったとします。妻はどうなるか。

夫のことを愛していればいるほど半狂乱になって怒る。これを厳しいと言いますか。言わない。当然の反応です。聖書では、神が花婿で私たち人間が花嫁にたとえられています。神と人との関係は結婚とよく似ている。神は私たちが妬むほどに愛しておられますから、私たちが他の神を拝むと怒る。神が厳しいのではなくて、浮気をしている人間の方が悪いのです。ですからこう考えたくになります。他の神を拝んでも何も言わない神は、本当に私たちに関心があるのか。少し心配になってきます。

### 2) 救いの道を備える神

神が怒るのは正しいとしても、それがいつまでも怒り続けていたらどうなるか。これはこれで困るわけです。もう一度夫婦の関係のことを考えてみましょう。浮気をした夫が妻とよりを戻したいと思ったとします。まず何をするか。夫はごめんと謝らなければいけない。次に妻の方です。妻も怒りを鎮めて、夫を赦そうという思いがなければ和解はできない。実は、神も同じです。神がいつまでも怒っていたのでは和解はありません。神は怒りたくて怒っているのではない。むしろ私たちが和解し、私たちが救いたのです。いったいどこに救いの道があるのか。36節です。「彼の子には一つの部族を与える。それは、わたしの名を置くために選んだ都エルサレムで、わたしのしもべダビデが、わたしの前にいつも一つの灯火を保つためである。」加えて39節ではこうも言います。「このために、わたしはダビデの子孫を苦しめる。しかし、それを永久に続けはしない。」

これを読んで分からないことが二つあります。一つ目ですが、この時すでにダビデは死んでいます。ところが「わたしのしもべダビデが、わたしの前にいつも一つの灯火を保つ」と言われる。まるでずっと生きていたような言い方です。二つ目ですが、ダビデの子孫とは誰のことなのか。永久に続けないとしたら、ではいつ終わったのか。

### 3) ダビデが灯火を保つ：ダビデの子が光となって来られた

多くの方々は、希望とか幸せを見つけたいと願いながら一生懸命生きていたろうと思います。努力の結果、ささやかだけでも確かに希望や幸せを見つけて喜ぶ瞬間はあります。でも折角見つけた光もいつかは消えてしまうことも経験から知っています。いったい誰がいつも光をともしせるのでしょうか。ヨハネの福音書には、イエス・キリストは、「すべての人を照らすまことの光であった」と書かれています。

ます。「わたしのしもべダビデ」とは、ダビデの子として来られたイエス・キリストのことを指しています

#### 4) 永久に続けはしない：死とよみがえり

そうしますと「永久に続けはしない」とは何か。世の光となって来られた方は、やがて十字架で苦しみを受け、人々の罪のために刺し殺され、墓に葬られました。人々はそれを見たとき、この方も永久に死の中に閉じ込められたのだと思いました。しかし、この方は三日目に墓の穴からよみがえります。「それを永久に続けはしない」とはこのことを指しています。

私は光を求めてかつてあちこち探していました。あつたと思ったらすつと逃げていく、消えていく、そういう連続でした。そうするうちに今日明日を楽しく生きればいいやと投げやりになり、ついには自分を誤魔化し、人を誤魔化し、誰かを傷つけていました。ますます真っ暗になっていくしかない。絶望しました。

ある日、イエスに出会ったとき暗闇の中に光が灯っているのを見ました。小さな光でしたが、もう暗闇の中で怖じ感う必要はない、あなたは涙のない国、絶望という名前がない国、神の国に招かれていることを教えられていきました。もし主イエス・キリストが灯してくださる光がなかったらどうなっていたか。そのことを考えるとき、改めて主の恵みに感謝したいと願います。